

忘れ得ぬ人々

佐藤 靖雄

何気なく開いた、古い日耳鼻会報のひとことに釘付けになった。

“照射を併用すると、手術侵襲が少なくて済む”と、初代岡田和一郎先生が、定年後に強調された。また、当時は、頸部転移例の原病巣手術はコントラであったが、

“手術法を工夫すると、禁忌ではない”ひとりひとりが、共通で多様であるから、融通無碍の可能性がある。

“上顎を上下に分け、残せるところは残す。副鼻腔手術に慣れている耳鼻科医だからこそ、無理押ししない細かい操作ができる。定型手術を旨とする外科に、上顎癌を渡すな。”

臨床例の経過から、少量の放射線は、生物が持っている機能を刺激するホルミシス効果を感じさせたい。形態機能の保存を希望している病人の声なき声に沿った、卓見であったが、80年早すぎた。癌治療をだから、と、術後の顔面欠損や醜形は目をつぶった‘全摘’の大波にのまれて、日の目をみなかった。しかし、あとあとも考えた慎重な操作と少ない治療配量の、‘臨床の知’が、心の琴線に触れると、意識の深い層が目覚めた。バランスを保ちながら、志向的進化の螺旋階段を登り、科学の進歩と共に機が熟し、内視鏡下手術が普及したのも、外科の耳と内科から咽喉が連れ添った耳鼻科岡田先生の情動が開花したといえよう。

復員後に、武蔵野赤十字病院で、増田胤次先生にお目にかかると、病理標本を隅から隅までの鏡検をされ視診触診のよりどこになされ、同時に生活習慣も味付けした経過診を、黙々と続けられていた。

“病態がしてくれ、と療治をおしえている。君達は治らないよう、治らないよう療治している。無駄



な検査や無理押し操作はいただけない。先入観や思い込みで数打ちや当たるは、ばかげたこと。頭だけで見るのは何も見えないのと同じだ。微妙に違う病態の移り変わりを、しっかり見る目は自分で鍛えるものだ。”

手術は、局麻下に、それも胡椒の丸呑みではなく、器具の点検、術台の高さ、頭位、術過程イメージによる器具配列と、メスの刃並びや鉗の接点・遊びも再確認され、局麻剤注射点と針の方向、ついで5分間満を満を持されて執刀、左手の役割、鉗のハンマーモーション、スタンツエの倒し方のノウハウが、以心伝心で無駄なく流れる裏に、軟部の硬結、骨面の粗糙・欠損、粘膜腫脹とフィブリンや壊死付着、硬軟肉芽の混在・脱落・出血傾向を素早く読みとられて緩急適切に処置されるノウハウは、正宗の銘刀作りもかくやと、見るだけで盲亀の浮木、伝統文化の古を開かれた。

とくに、ご自身より年上の病人は丁寧に診察され、意思を尊重されながら「楽しく有意な生き方」が、40年後のRNA干渉・分子標的操作と辻褃が合い、治療は腫瘍熱効果よろしく、拒否的共存といかないまでも、癌細胞を凝固壊死・アポトーシスに導く、自然の流れに働く隠れた役者を、感じられた節がある。

卒後14年目に大学に呼ばれた。切替一郎先生は、上顎癌の成績が芳しくないことを心ならずとされ、放射線科と討議を重ねられ、回りに、先を読み、猶予を置かない処置と雰囲気作りのチャンス・チャレンジの‘かおり’が漂っていた。たまたま、中央放射線部が始まったこともあって、好奇心も加わり、百聞は一見に如かず、夏の7月8月、森田守医師と放射線科に出かけて、外来診療と照射実施を体験した。また、中央手術部で、外科の局所灌流も見学し

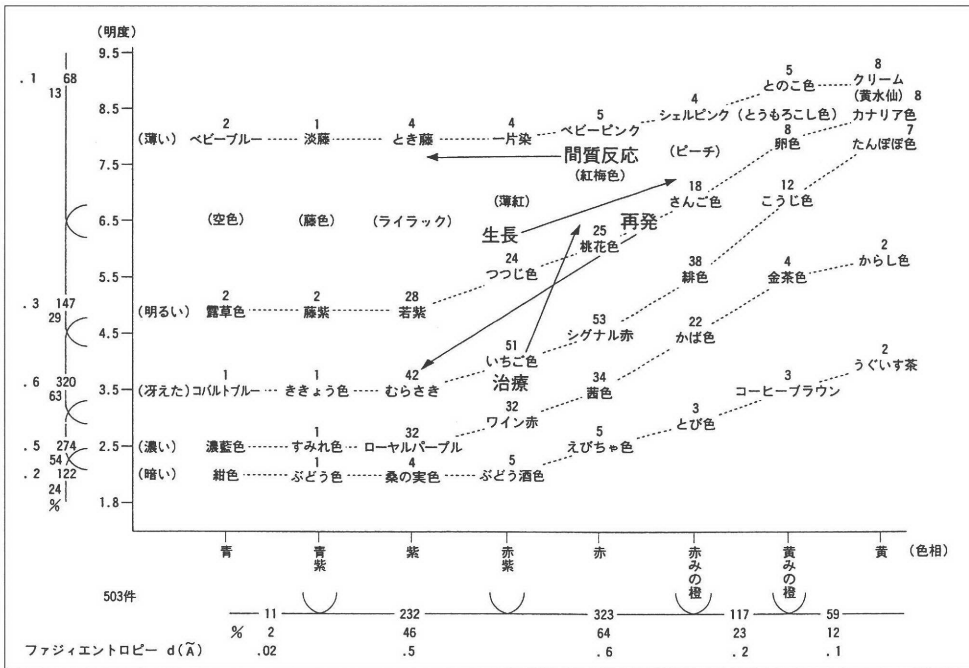


図1 色物差し

たが、配量を匙加減し易い熱注や固型剤刺入、軟膏塗布に落ち着いた。

診療は、視診触診で始まり、視診触診で終るため、腫瘍の色の違いをニックネームでとらえると記憶し易く、曖昧さも認めた比較であって、主観で活性を、また似たものの振舞いから流れの揺らぎを推定している。生き物は初めて見るものでも、敵か味方か中立かと、自分にとっての意味を見抜いて生き延びているわけで、意識の深い所にある先行理解という方法論の見方で、ミクロの同時性揺らぎも推定している (図1)。(補)

ミクロとマクロは次元が違う別のものであるが、それぞれが病態の部分として、意味の上で結びついているため、重ねて診ている。

シグナル赤の扁平上皮癌が、照射を始めると苺色傾向になる所は、細胞膜と核が急変して散発的に短時間で縮み隣と離れたばらばらの粒が周りの細胞に食べられるアポトーシスが多く、診ているだけで済む。同じようなシグナル赤色だが、照射で珊瑚色傾向になる所は、細胞質が徐々に膨らんで崩れだすネクローシスになるものが多く、周りに炎症細胞が集

まって大騒ぎしながら後片付けをしているため、死から生を見た流れに沿ったお手伝いの、吸引清掃している。要するにイソップの太陽と北風である。旅人がいらぬものを自分で脱ぎ捨てるように、周りとの絡みで仕組が変わり、これがまた周りを刺激して免疫系の活性上昇につながるのは、5回照射(1000ラド)が限度であろう (図2)。

三先生の情報単位断片がなじんだ上顎癌3者併用(1965)は、納得自助のもとで免疫的配慮の腫瘍減量、照射、化療を同時に併用して、生物学的効果も包み込んだ病人の治療、つまり、生きている意味に比重を置いた文化的進化といえる。これを広げた頭頸部がん集学診療(1972)は、生き甲斐をチェックポイントの筆頭に置いて、遺伝情報・環境情報・生活習慣の心気情報も加え、未知の流転にも少ない配量で対応し易いソフト戦略と、病態が教えている治療操作を押し引きのハード戦略とを、融通無碍に溶け合わせたお付き合いが、身近の人にも波及して、個と種の生存と自得を目差した仮説である。

行ったからには、とことん診るわけで、1980年から狩野充二院長の厚意で、病人とお付き合いを続け、

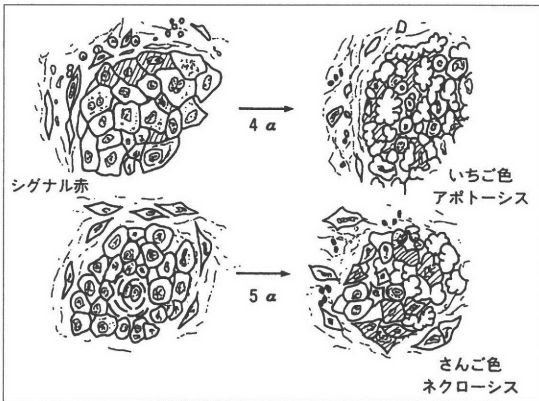


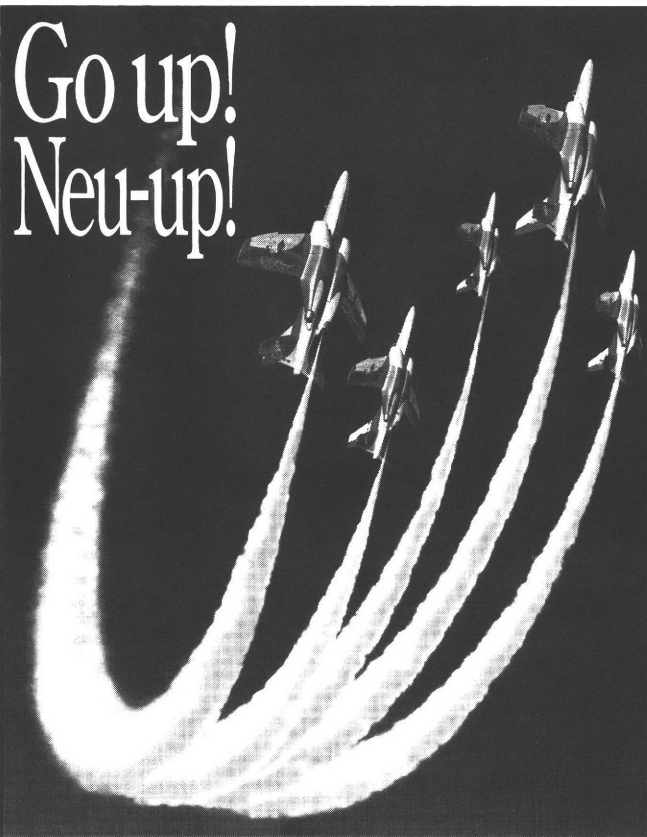
図2 Hormesis 効果

海老原敏がんセンター東病院長の配慮で多地点TV会議を聴講すると、知的刺激の流れが、市立柏病院・慈恵柏病院検討会、医師会講演会の日常的多彩なド

ラマを吹き分け、できたら基礎の方もいっしょに、生きる喜びの可能性を見抜くのは皆さんです。

ここに来ただけで落ち着くと、病人に言われるのも、意識する「いま」は絶えず進むため、生活・背景に足りた流れにゆだね、ドーパミンも働き、心地よい時間が延びて、ウイルスも味方にミクロの再生分化を誘導し易い、袖触れ合った病人も加えて、彼岸での土産話にも事欠かなく、余韻を楽しんでいる。

(補) 赤外線とコンピュータを利用して色の違いを見分ける LASH 技術は、子宮頸癌の第 2 相臨床試験が進み、2006年サイエンス・アンド・テクノロジー・インターナショナル社が商品化と聞く。(日経サイエンス 34巻 4号 20頁 2004年)



世界初の
ミューテインG-CSF製剤



遺伝子組換えヒトG-CSF誘導体制剤
指定医薬品/要指示医薬品* (薬価基準収載)

ノイアップ® 注 25 100
50 250

Neu-up for Injection 注射用ナルトグラスチム(遺伝子組換え)
25µg/V, 50µg/V, 100µg/V, 250µg/V

*注意-医師等の処方せん・指示により使用すること

■「効能・効果」、「用法・用量」、「使用上の注意事項」は製品添付文書をご参照ください。



製造発売元 [資料請求先]
協和発酵工業株式会社
東京都千代田区大手町1-6-1
http://iyaku.kyowa.co.jp/

03.10.